

2023 年 7 月 15 日(土)

フィンランド語の世界

日本でフィンランドと言えば、ムーミンやサウナ、それにサンタクロースなどを思い浮かべる方が多いでしょう。また、クラシック音楽に興味のある方ならシベリウス、現代建築に造詣の深い方なら A.アールト、それに高度な社会保障制度など、どちらかと言えばロマンチックで穏やかなイメージが強いかも知れません。しかし、ウクライナ戦争の中、国境の東側半分をロシアと接するフィンランドでは、にわかに「NATO 化」という言葉が取り沙汰される状況が生まれています。

ところで、学校帰りに書店で実に小気味いい本を見つけました。題名は『フィンランド語の世界』、出版元の白水社の作品紹介によれば、「外国語学習を始めると、その言語が話されている土地に行きたくなる。滞在や生活も夢みる。現地で目にする「世界」を読むための一冊」となっています。その意味で、地理学研究とも相通じるものがあると言えるでしょう。著者の吉田 欣吾さんは巻頭言で、「SDGs が「流行」していますが、持続可能性という考え方の重要な柱の一つが「生物多様性」や、その裏返しである「文化の多様性」の擁護のはずです。それでは、SDGs を宣伝文句のように利用する大学で英語以外の言語教育を削減・廃止しようとするのはなぜでしょうか」と。そう言われてみれば、大学に限らず、今年の 4 月から NHK テレビの語学番組からアラビア語、ロシア語、ポルトガル語が消えています。こうした大きな看板や声の前に、少者を切り捨てる今日の状況を批判はいかなもののでしょうか。本書で取り扱われているフィンランド語は中級以上のればるですが、道路標識、トイレ、サウナなど多岐に渡りますが、その本音は正しくフィンランド文化を理解してもらうことにあると言えるでしょう。

吉田さんは、長年、東海大学文化社会学部北欧学科でフィンランド語を教えてこられた方で、日本で数少ないスカディナヴィア半島北部のサーミ語の研究者でもあります。実は、吉田 欣吾さんとは 40 年以上も前に同じ職場で働いていたこともあり、彼がフィンランドに留学していた時に一度訪ねていったことがある仲なのです。

■吉田 欣吾(1996)『サーミ語の基礎』大学書林, 266 頁.

■吉田 欣吾(2023)『フィンランド語の世界を読む』白水社, 190 頁.

校長 石飛 一吉